

〔資料⑧〕JLAC10の構造変更について

改善サブ WG 会議で出された案

討議対象:検体検査についてのみ

目標:JLAC10 普及のために必要な改善

:データ2次利用などに利用可能なコード構造を考案する。

1. 地域連携が必要な項目に対して検査が一意に表現される 17 桁のセットを提供する。
2. 分析物=分析物+識別とし 9 ケタとする。
3. 分析物(分析+識別)+新識別で 9 ケタとする。

1. 地域連携が必要な項目に対して検査が一意に表現される 17 桁のセットを提供する(案)

共用サブWGと協力し検討する。

2. 分析物=分析物+識別の9ケタ(案)について

- ・分析物コード=検査項目名とすることで、コード体系をシンプルにする。
- ・分析物+識別 or 結果識別(固有)としすべての分析物を9ケタで表示する。
- ・識別と結果固有を有する場合は、従来の識別(4ケタ)に新たなコードを附番する
- ・識別コードと結果固有の両方を有するコードは、定量・定性コードを無視するとアレルギー関係のみの約 34 項目である。

メリット

1. JLAC10 コードを大きく変えることなく行える。
2. 附番の際、分析物コードの選択が容易となる。
3. 識別コードに関わる重複コード生成の防止となる。
4. コード体系が、分析物、材料、測定法、結果(共通)と独立した要素となり、データの検索が容易となる。
5. 測定方法の細分化により、データ2次利用などにも有用なコードとなる。

課題

1. 識別と結果固有の両方を有するコードに関しては従来の識別コードの位置にコード新設の必要がある。
2. 従来に比べて、分析物コード数が多くなる。

具体案

- 分析物コードを現 5 ケタあるいは、6 ケタで分析物＋識別の情報量を確保する。
 - 識別コードは、新たに 2 次利用などに利用可能な粒度をもつ要素とする。
 - オーダコードは、新識別コードは***などを使用し細分化しない。

メリット

- 現状の体系を維持できる。(識別コードが残る)
- 識別コードを有するコードのみの再編で実現可能
- 現状の JLAC10 に新要素を加えることで、従来の用途だけでなくデータ二次利用などに有用な粒度の高い情報を持ち得る。

課題

- 識別コードを有する検査項目の分析物コードを附番する必要がある。
 - 分析物5ケタ
 - 識別コードを有する分析物をすべて附番し直す。
 - 分析物6ケタ(分析 5+ 識別 1)
 - 1ケタで識別コードを分類する。(たぶん厳しい)
(1分析物1項目に対応する最多識別は 5A100 に約 340 項目ある。)
 - 識別コード 2 ケタなら可能かもしれない
- 新識別の要素をどうするか？
データ二次利用に有効な検査法コードの検討が必要となる。

以下参考例

分析物7ケタ 識別2ケタの例

リボ蛋白分画	3F135000002323200	3F135	0000	023	232	00	リボ蛋白分画
リボ蛋白分画	3F135000002323251	3F135	0000	023	232	51	aリボ蛋白
リボ蛋白分画	3F135000002323252	3F135	0000	023	232	52	pre-bリボ蛋白
リボ蛋白分画	3F135000002323253	3F135	0000	023	232	53	bリボ蛋白
リボ蛋白分画	3F135000002323254	3F135	0000	023	232	54	pre b+b

結果固有を分析物に移動し7ケタとする

識別コードは2ケタで存続させる

リボ蛋白分画	3F135000002323200	3F13500	00	023	232	00
リボ蛋白分画(aリボ蛋白)	3F135510002323201	3F13551	00	023	232	01
リボ蛋白分画(pre-bリボ蛋白)	3F135520002323201	3F13552	00	023	232	01
リボ蛋白分画(bリボ蛋白)	3F135530002323201	3F13553	00	023	232	01
リボ蛋白分画(pre b+b)	3F135540002323201	3F13554	00	023	232	01